

青年会から見る沖縄社会

嵯峨 佳菜

1. はじめに

空前の「沖縄ブーム」によって全国に広まったものの一つとして、「エイサー」が挙げられる。沖縄の盆踊りと言われるエイサーは、映画「涙そうそう」でも夏の風物詩として登場している。

そのエイサーの主な踊り手が「青年会」といわれる集団である。

日本本土において現在青年会活動が活発な地域は少ないように思う。実際に私自身その存在すら知らなかった。しかし、ある授業で昭和 36 年の秋田国体を調査した際、青年会の活動が成功につながっていたことが分かった。つまり、少なくとも約 50 年前には秋田においても青年会の活発な活動があったということになる。

過去には同じように青年会が存在していたにも関わらず、なぜ秋田では存在さえ知られず、沖縄では積極的な活動が行われているのだろうか。

今回の調査では、青年会活動の大部分を占めるであろうエイサーがどのようなものかを体験し、また幸運にも実際に青年会という現場に入ってお話を伺うことができた。そこで、青年会が今現在どのように活動し、会員にとってどのような存在であるのか、また青年会の活動が沖縄県全体にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしていく。

2. 青年会の概要

2.1 青年会とは

青年とは人を年齢によって分けた区分の一つである。しかし、その厳密な年齢の定義はない。普通は 10 代後半～30 代前半の人のことを指すようである。

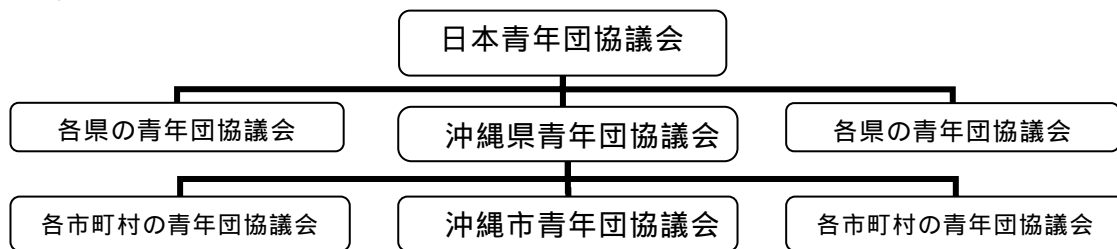
つまり青年会とは、10 代後半～30 代前半の人々が地域ごとに集まった年齢別集団なのである。他の年齢別集団の例として、子ども会（小中学生）、婦人会（30 代～40 代の主婦）、老人会（退職した男女）などが挙げられる。

入会は強制ではなく任意であるのが一般的だ。最近では青年会ごとに行っている活動に特色がみられ、芸能の担い手ともなっており、地域の枠を超えて参加している例も多い。

2.2 沖縄の青年会

沖縄県では 2006 年時点で 406 団体の青年会が存在している。また沖縄県青年団協議会ホームページによると 2005 年 6 月時点で県下 49 市町村中 37 市町村が加盟、6 市町村が未組織となっている。

まず、沖縄県青年団協議会、沖縄市青年団協議会とはどのような組織かを明らかにする。



沖縄県青年団協議会

1948年12月17日に沖縄青年連合会として設立、1958年3月30日に現在の沖縄県青年団協議会に名称を改正する。主な活動として「青年ふるさとエイサー祭り（7月上旬）」、「沖縄県青年大会（8月中旬）」、「ハートフルピース in 沖縄（10月上旬）」などがある。

沖縄市青年団協議会

2003年時点で20団体が加盟。2007年8月30日に沖縄市を「エイサーのまち」と宣言した。主な活動として「全島エイサーまつり」がある。

今回、沖縄市青年団協議会（以下市青協）の川井田一馬会長はじめ多くの会員の方にお話を伺った。

3. 青年会活動

3.1 エイサー

(1) エイサーとは

エイサーとは沖縄諸島の盆踊りに相当する踊りである。一般的に旧暦の7月15日にあたる旧盆の先祖をお送りする日（沖縄ではウークイという）の夜に、青年男女が集落内を踊り巡り、各家の無病息災、家内安全、繁盛を祈り、祖先の霊を供養する行事のことである。

その起源は諸説あるが、一般的には、1603年に沖縄へ渡ってきた京都・浄土宗の僧侶袋中が、経典のなかから選んだ経文を易しくして琉球語に訳し、さらに節をつけた浄土宗系の念仏歌を基にしてつくられた念仏踊であり、人形芝居「京太郎（チョンダラー）」をしながら各地を回る念仏僧（ニンブチャー）によって庶民に広められたとされている。エイサーという呼称は、念仏歌の囃子（ヘーシ）の「エイサー、エイサー、ヒヤガルエイサー」からきているという説と、沖縄最古の書である「おもろさうし」の14巻にある「いろいろのゑさおもろ」の「ゑさ」が語源という説が主に伝えられている。



写真1 旗頭

踊りの隊列は旗頭、太鼓、小鼓（パーランクー）、男女の手踊り、三線（サンシン）と歌い手の地謡（ジウテー）と続き、隊列とは別に、地区によって京太郎（チョンダラー）や三郎小（サンラグワァ）、中脇（ナカワチ）と呼ばれる道化役が盛り上げる（写真1～5：園田青年会公式ホームページより転載）。

道化役の踊りにはストーリー性があり、各家の祖先の霊を供養したあと振舞われたお酒を、棒で吊るした酒かめに入れて持ち帰るといった酔っ払い踊りなどがある。

エイサーの衣装は、かつては男性が芭蕉布の着物にワラでつくった帯、たすき、鉢巻を締め、女性も芭蕉布か紺地の着物にワラか白布の鉢巻を締めていた。戦後は祖先供養の踊りから見せる踊りへと変わり、エイサーの衣装も年々派手さを増してきている。

そのなかでも勝連町（かつれんちょう）の平安名（へんな）エイサー、平敷屋（へしきや）エイサーでは、白衣の上に黒衣を着け、白いたすきがけをしたこの地域独自の衣装を現在も受け継いでいる。

エイサーは本島中部で昔から盛んに行われてきたものだが、北部の大宜味村喜如嘉（おおぎみそん・きじょか）には女性だけが円陣を組んで踊る女エイサーが残っている。

（2）伝統エイサーと創作エイサー

現在では様々なエイサーが存在し、魅せて楽しむエイサーも多くなってきているが、大きく分けると伝統エイサーと創作エイサーに分けることができる。

伝統エイサー

昔からエイサーが根付いている地域にあるエイサーで、何十年もの歴史ある演舞を青年会によって保存・継承しているもの。またその地域の青年会以外の、元来エイサーが根付



写真2 太鼓



写真3 小鼓(パーランクー)



写真4 手踊り



写真5 チョンダラー

いていない地域の青年会でも、エイサーが根付いている他の青年会から指導を受け、エイサーに取り組み発展させている青年会も存在する。

このように、何代にも渡って独自のリズムや振り付けを継承しているエイサーの型を伝統エイサーという。

創作エイサー

伝統的な型にこだわらず、時流に合わせた振り付けやサウンドを取り入れ、近年成長しているエイサーが創作エイサーである。伝統的な沖縄民謡だけでなく、ロックやポップスといった楽曲も積極的に取り入れ、エイサーにダンス的なエンターテインメントの要素を取り入れている団体もある。その代表的な団体が「琉球國祭り太鼓」である（写真6：園田青年会公式ホームページより転載）。

また、元来エイサーが根付いていない地域の青年会が、他地域のエイサーを参考にしながら独自のエイサーを作り、取り組み始めたエイサーも、創作エイサーと呼ぶ。



写真6 琉球國祭り太鼓の演舞風景

(3) エイサーのまつり

沖縄全島エイサーまつり



写真7 全島エイサーまつり風景（園田青年会公式ホームページより転載）

沖縄全島エイサーまつりは平成 19 年で第 52 回目を迎える伝統あるイベントである。また、県全域から選ばれた県内屈指のエイサー団体が出場するため、エイサーをする者にとってこのまつりに出場することは憧れであり目標となっている。

毎年旧盆明けの最初の週末に行われる。1956 年のコザ市誕生を機に「全島エイサーコンクール」として始まり、今では沖縄の夏の風物詩として、日本を代表する「まつり」の一つとなった。



写真8 青年会の演舞中に舞台に入って踊りだす親子

まつりには前述の通り県全域から選抜された青年会などの団体や、全国の姉妹都市や協賛団体からの踊り手たちが集結する。本場のエイサーの醍醐味を味わうことが出来る一大イベントである。

まつりは3日間にわたり、まつり初日には道ジュネー¹⁾が行われ、2日目、3日目には全島から集められた青年会のエイサー大会が沖縄市コザ運動公園で開催される。また、運動公園サブグラウンドで「ビアフェスト」と呼ばれるビールまつりが同時開催される。これは沖縄のビールメーカーであるオリオンビールが感謝の気持ちを込めて行っているもので、工場から直送されたビールが格安で売られるほか、屋台も多く出ている。よって会場周辺では、夜遅くまで祭りの賑わいが続き、沢山の人が訪れる。

このような県民のまつりへの関心の高さは、新聞・ニュースなどメディアによる連日の報道からも窺える(写真9・10・11)。



写真9 『琉球新報』2007年9月2日一面記事



写真10 『琉球新報』2007年9月3日一面記事



写真11 『沖縄タイムス』2007年9月4日一面記事

他のエイサーのまつり（日付は 2007 年の開催日）

- ・ 青年ふるさとエイサーまつり
- ・ 一万人のエイサー踊り隊
- ・ うるま市エイサーまつり
- ・ うらそえ青年祭（9月16日）
- ・ なは青年祭（9月8～9日）
- ・ 新宿エイサーまつり
- ・ 伊江村青年会エイサーまつり

3.2 旗頭

（1）旗頭とは

旗頭とは高さ約 6m、総重量約 50kg もある巨大な旗のこと、またその旗を上げることや持ち上げる人のことを指す。

ここでは久茂地青年会の旗（写真 13）を例に挙げて、詳しく紹介する。

旗頭：むいじる（一番旗）

めでたい時に好んで使われる松竹梅に、千年の寿命をもつという鶴を配し、喜び事がますます盛んになるようにという願いが込められている。

旗字：與鳳翔

天上の鳥・鳳凰が雲の上をゆく鶴に大きな力を与えてくれるという意味。転じて我等に力を与えてくれという願いが込められている。さらに、鶴と鳳凰とともに飛びめぐる。勝利の瞬間に喜び舞い踊るという二通りの意味がある。

以上のように、旗頭は地区によってそれぞれことなる願いと表現がされているため、その地区の顔であり誇りである。

旗は一人の人で順番に持ち上げられるため、巨大な旗を持ちバランスをとるのは難しいが、旗は地域のシンボルであるため絶対に倒してはいけない。よって演舞する青年会などでは演舞前約 1 ヶ月前から毎日練習を重ねる。

その旗頭が集う最も大きな行事が那覇まつりで行われる那覇大綱挽である。



写真 12 うらそえ青年祭ポスター



写真 13 久茂地青年会の旗
（パンフレットより）

(2) 那覇大綱挽

沖縄県那覇市において、「那覇まつり」が毎年 10 月に行われる。そのメインイベントとされているものが「那覇大綱挽」である。

この那覇まつりで使われる大綱は自然の材料（米藁）で作られた最も巨大なロープとして 1995 年にギネスに認定、毎年記録を更新中である。写真 14 にも「ギネス認定 世界最大の大綱挽」とポスター中央に記載されている。

最近でギネス認定登録の更新を受けたのは 1997 年に開催された第 27 回那覇大綱挽で使われた大綱である。全長 186m、総重量 40t220kg、直径 1m58cm、挽き手 15,000 名、参加人数 275,000 名と認定登録されている。



写真 14 第 37 回那覇まつりポスター

沖縄の農村や漁村で行われている綱引きは、豊年祈願や災厄祓い中心であるが、那覇の大綱挽は“交易都市那覇”を象徴する、余興性の強い行事である。

綱挽勝負は東西にわかれて一回のみ行われ、2メートル引き込んだ方が勝ちとなる。ひき終わった綱を持ち帰ると無病息災など 1 年を幸せに過ごせるといわれており、綱切り担当の人もいるため、手を伸ばせばもらえるという。

また那覇大綱挽では「引」ではなく「挽」の字が用いられている。「挽」という字は力を込めて引っ張るという意味で、用例として「車を挽く」「のこぎりを挽く」などが挙げられる。那覇大綱挽の「挽」の字は琉球王朝時代からの慣習として用いられ、巨大な綱が地面を往復し、摩擦を起こす様子からこの字が使われるようになったと言われている。

第 37 回那覇大綱挽・旗頭行列プログラム (2007.10.14 開催)	
<p>・旗頭行列 (国際通り)</p> <p>[11:30] 集合 (東:壺屋小学校 西:牧志公園)</p> <p>[11:45] 出発式</p> <p>[12:00] 国際通りにて行列出発 (先陣:東 後陣:西) 先陣は毎年交代</p> <p>[14:30] 旗頭行列終了 (15:00 まで待機・休憩)</p>	<p>・那覇大綱挽 (国道 58 号線・久茂地交差点)</p> <p>[15:00] 交通規制開始 那覇大綱挽会場へ旗入れ開始</p> <p>[15:20] 美ら旗我栄(毎年交代)</p> <p>[15:40] 空手我栄</p> <p>[15:50] 太鼓演舞</p> <p>[16:00] 綱寄せ かぬちつぎ 綱方我栄</p> <p>[16:20] 鉦子打ち込み・大綱挽開始 (勝負制限時間 30 分間)</p> <p>[16:50] カチャーシー²⁾ 打ち上げ乾杯</p> <p>[17:00] 交通規制解除・那覇大綱退場</p> <p>[19:00] 国道 58 号交通規制全面解除</p>

写真 14 のポスターのように 2007 年度の「那覇まつり」10 月 6~8 日に予定されていたが、台風接近のため 10 月 13~14 日に変更された。

(3) 旗頭行列

旗頭行列は東七旗・西七旗の十四旗で構成されている。

上記の通り、旗は地域のシンボルであり絶対に倒してはいけないため、約1ヶ月前から毎日練習を重ねる。

旗頭は各地域の青年会を中心に演舞され、その技は青年会や自治会を通して受け継がれていく伝統芸能のひとつなのである。

青年会毎に旗頭(一番上についている飾り)旗字(旗に書かれている文字)は異なり、それぞれに意味がこめられている。多くの青年会では一番旗と二番旗と呼ばれる青年旗があるが、最近では小学生が旗上げに参加できるように、ミニ旗頭も作られている。

また、元来旗頭は女性は持つてはいけないことになっている。それは旗頭に触れたりまたいだりしてしまうと妊娠するという言い伝えがあるからだ。しかし今では女性旗を持つ青年会もあり、多くの人々が旗上げに参加できるよう多様化しつつある。

4. 青年会の実態

4.1 那覇市久茂地青年会

那覇市の中心部に久茂地小学校がある。そこを練習場所として活動しているが久茂地青年会である。

事前の予定ではエイサーを主な活動内容としている青年会のみを調査対象に挙げていたため、那覇市内の青年会については情報収集をしていなかったのであるが、偶然にも出会い、練習を見学させていただくことができた。突然の訪問を快く受け入れてくださり、お話を伺うことができたので、その内容をまとめていく。

(1) 青年会の構成

久茂地青年会は1971年の第一回那覇大綱挽のために結成された青年会である。青年会員に年齢制限はなく、現在久茂地青年会の会員数は100名ほどいるようだ。

主な活動内容は那覇大綱挽で行う旗頭である。すでに述べたように、那覇大綱挽の行われる那覇まつりは10月上旬に行われるため、その1ヶ月前である9月上旬から練習が始められる。練習は月曜日から土曜日までの20時から22時まで行われる。今年度は地元の盆踊りでの出演依頼があったため、7月半ばから練習が開始された。

実際に主に旗上げをして旗頭となるのは40名程度で、太鼓など参加者全員を含めると、一回の演舞



写真 15 小学生らの練習

に参加するのは青年会員以外の人もいるため、100名を超え150名程度になるという。その他の活動としては、半年に一回の地区の清掃やボランティア活動も行っている。

(2) 実際の活動の様子

私が訪問したのは9月3日の20時ごろであった。まだ本格的に練習には入っておらず、10代後半～20代の青年たち10名ほどが小学校グラウンドの中央に集まり、練習用の全く装飾のついていない棒が置いてあった。グラウンドの隅のほうでは小学生ら10名程度が集まり、20mほどの短い棒が同様においてあった。旗頭行列では小学生も参加するがその様子を見守るように校舎の方には保護者や指導者ら約20名が集まっていた。

実際に見ることはできなかったが、上述の通りこの旗頭に触れると妊娠すると言われていたことから、子どもが欲しい若夫婦などが「触ってもいいですか」と訪れてくることもあるそうだ。

青年達や保護者、指導者らは時間と共に人が増えていき、訪問を終えた21時頃には総勢70名ほどになっていた。

保護者同士で会話をしながら練習を温かく見守る様子や、様々な年代の人々が自然に交流している様子が印象に残った訪問であった。



写真 16 練習の様子

4.2 浦添市内間青年会

那覇市のすぐ隣に位置する浦添市では元々はエイサーがなかった地域である。しかし現在では数多くのエイサーのまつりにも活発に参加している。事前調査でインターネットで情報収集していても「内間青年会」の名前を何度も目にし、大衆に向けての情報発信も積極的に行っていることがわかる。

フィールドワークでは現青年会長の、前青年会長に最初にお話を聞き、その後実際にゆんたく³⁾に参加することができた。

(1) 青年会の現在の構成

22年間途絶えていた青年会を発足させ現在16年目を迎える。高校1年生から入会でき上限はなく、現在約70名の会員がいる。7月から練習は始まり、毎日20時から22時まで練習を行う。

主な演舞場所やイベントは、旧盆の内間の



写真 17 内間公民館入り口

道ジュネー、浦添市てだこまつり、うらそえ青年祭や一万人エイサーなど地域での活動も多い。

練習場所は浦添高校のすぐそばにある内間公民館。

(2) 青年会の歴史

内間では過去に青年会がありエイサーも行っていたものの、会長の不在などを理由に消滅と発足を繰り返していた。最終的に 1970 年に消滅して以来、青年会は途絶えたままであった。

しかし、1992 年 2 月、石垣市で中学生の集団暴行死事件が起きたことがきっかけとなり、内間青年会は再発足することになる。

この発足した時期というのは、学校でのいじめや家庭内暴力事件が相次ぎ全国的にも問題になっていた時期であった。この時、地元である内間に帰ってきたのが内間青年会再発足の発起人である初代会長、金城龍一さんである。

大阪に出ていた金城さんは、結婚を機に地元である内間に帰ってきた際、自分が生まれ育った頃との地域の様子の変化に驚愕したという。行政による区画整理が行われた結果、マンションなどが多く建つようになり、外からの居住者も増えたため、隣人が誰かも分からないような事態に陥ってしまっていた。当然近所付き合いもなく、金城さんが体験してきた地域の行事がなくなってしまい、近所のつながりも希薄化していた。

「自分の子どもができた時、この地域は安心して育てられる環境なのか。」と感じた金城さんは、子どもが育つ地域を作っていくため、青年会の結成を呼びかけた。子どもが家庭の外に出て親の目の届かないところにおいても、地域の目で守られるような地域にするためには、地域のつながりが必要不可欠であり、地域のつなぎ役として青年会が必要だと考えたのである。

青年会の再発足は金城さんを中心に 7 名で始まった。メンバーの一人の女性がエイサーの経験者だったこともあり、エイサーをしていくことになった。青年らの新たな取り組みに対し、自治会をはじめ地域住民も好意的であり、順調なスタートをきったように思えた。

しかしその翌年の 1993 年 6 月、内間の校区の中学校で集団暴行死事件が起こった。この当時の中学生達は公園や商店街でたむろしていてもあまりに荒れていて地域の人が声をかけられるようなものではなかったという。

この事件をきっかけに、たむろしている青年たちに積極的にエイサーを一緒にやろうと声をかけるようになる。

<インタビューより>

たむろしている中・高校生はもっているエネルギーや時間を持て余しているだけであって、本当は素直ないい子たち。大抵「不良」と呼ばれる子たちは、親が共働きで

さみしい思いをしている。エイサーは子どもを育てていく環境を作るための手段であって、本来は目的ではない。エイサーは一つの団体競技であるから、上下関係、人間関係についても学べる社会人の学校のような役割も果たすし、何より自分の居場所が見つかる。また、エイサーは地域の活動として地域の人を集めるいい手段でもあり、自分たちの活動を周りの人に認めてもらえる。エイサーは地域をつなぐための一番の手段だった。

内間には元々「内間エイサー」が存在したが、当時の踊りを覚えている人がおらず、伝統エイサーの復活は不可能であった。そこで当初、「琉球國祭り太鼓」で創作太鼓、創作エイサーを習っていたが、本物のエイサーをやりたいと、自治会長の紹介を得て牧港青年会に習いに行く。青年会発足後2年目には、牧港青年会と一緒に12名で道ジュネーを行い、地域からの応援を受け、評価される。

3年目には2代目の会長へと替わり、内間青年会オリジナルのエイサーを作りあげる。すると浦添高校から「教えて欲しい」と指導の申し入れがあり、高校生へエイサーを教えにも行くようになる。この頃から地域の認知度も上がり、認められ支持されるようになっていく。

しかしそれとは反対に、自治会長からは苦言を呈されていた。公民館は自治会の管理下にあり、夜遅くまで公民館を使われることにかかる費用も自治会の支出となる。また練習で出してしまう太鼓の音なども、「騒音」と捉えられてしまっていた。はじめは好意的であった自治会だったが実際に集まった青年会員を見てみると、地域で「不良」と呼ばれているメンバーであり、自治会にとって青年会の存在はもはやお荷物のようになってしまっていたのである。

内間には子ども会がなかったために世代間の交流ができずにいたため、この頃から子ども会の発足が検討される。しかしながら上記の理由により、「青年達が子ども達の見本になれるわけがない」として自治会からの反対をうける。しかし、2代目会長は「青年達の素行が悪いのは後輩がいないからであり、人を育てるという意識が芽生えれば、青年たちも成長できる」として自治会を納得させ、子ども会を発足させた。

4、5年目からは子ども会も形になり、活発に活動が行われるようになる。定期的に子ども会への青年会のエイサー指導をしていく中で、青年達は子ども達の「先生」となりよき遊び相手にもなることで慕われ、道で会っても声を掛け合うようになったという。また子ども会にはその親や近所の人にも来るため、青年らの熱心な活動に触れる良い機会となった。

6、7年目には、エイサー指導だけではなく、子



写真 18 内間青年会の旗頭

ども会と青年会が合同でダム見学、バーベキュー、ピクニックや島へキャンプなどを行った。ピクニックは毎年8月に青年会と子ども会の合同行事として後に定例化した。渡嘉敷島へのキャンプは「太陽の子(ティードのファ)」と名づけられている行事で、青年の家を借り2泊3日で行うものである。下見等の念入りな準備を経て、青年会員30名を含む計100名で行う発足後の青年会にとって大きなものであった。以上のように子ども会と合同行事を精力的に行い、交流を深めていったのである。

さらにこの時期には、地域に青年会の活動をもっと知ってほしいという願いと、今までやってきた活動を記録として残したいという思いがあり、機関紙「茶貫軒丸」の作成、発行に着手した(写真19)。一部約4ページほどで、はじめは3ヶ月に一回の発行であったが、子どものいない世代の近所の方にも活動を理解してもらえるいい伝達手段となり、地域からの好評を得て、1ヶ月に一回の発行となっていった。



1P



2P



3P



4P

写真 19 茶貫軒丸 2002 年 5 月号 (2002 年 5 月 1 日 発行)

機関誌の発行を楽しみにしてもらえたことは、道ジュネーの際の理解と協力を得るために効果的であった。青年会の活動はほぼボランティアであるため、維持費等かかる支出に対し経済的に苦しい。そのため道ジュネーでは募金を募るのだが、地域住民の理解や支援は、金銭面でも現れていたのである。

8年目には、渡嘉敷青年会と交流を持つようになる。渡嘉敷島では漁業が盛んであり大綱挽が伝統として行われていた。そこで一週間という期間の中で、渡嘉敷青年会から内間青年会へは大綱挽を教え、内間青年会からは渡嘉敷青年会へエイサーを教えた。

9年目に入ると、10年目という大きな節目に向けてより大きな活動に着手していくようになる。総合的な学習の時間に内間では70年ほど前には大綱挽が行われていたことが分かり、復活させようと動き出した。まず、そのために必要な資金を集めるためにもと「芸能祭」を開くことになる。当時できた芸能は限られていて数が少なかったため、獅子舞や棒術も本格的に練習を開始し、また婦人会の協力を得て舞踊を習い、最終的に昼の部、夜の部で異なる計30演目を披露した。

10年目である翌年には、大綱挽への本格的準備に入る。まず大綱を作るためには大量のワラが必要なため、一週間青年会員が入れ替わり立ち替わり、のべ40人が手伝いにいった。その後、ワラを使える形にしてトラックに積み4トントラック2台を使って運ぶというとても手間のかかる大変な作業を行った。

無事出来上がり、大綱挽当日には式典がもたれ、その場には市長もきて挨拶を行った。大綱挽のため、土日だったものの道は封鎖され行われたこの壮大な行事は、地域の住人約1,000人が集まり大盛況に終わったという。

ここで青年会を中心とした地域の輪ができていくことがわかる。青年会は地域を動かすことのできる力を持ってきたのである。

11年目以降からも「芸能祭」「太陽の子(ティーダのファ)」「ピクニック」などの行事は継続して行っていた。しかしこの頃から、社会情勢の変化とともに青年会の様子も変わり始める。

(3) 現状と課題

内間青年会は再発足後10年間、前述の通り、また述べていない数多くのお祭りやイベントなどにも参加し、様々な活動に着手し凄まじい勢いの元怒涛の10年間を過ごしてきた。現在でも継続して行われている活動もあれば、停止しているものもある。

ここでは、青年会員の方々へのインタビューで得たことをもとに青年会について会



写真 20 茶貫軒丸 8月号
(2001年8月1日発行)

員自身が現在どのように感じているかを明らかにし、そこから見えてくる課題を述べる。

青年会

青年会とは家族であり仲間であると 20 代後半以上の会員は話す。青年会は家族であり仲間。どこからでも公民館には人が集まってくる。学校や仕事が終わって公民館に来れば誰かには会え、そのまま朝まで飲んで、公民館からまた学校や職場に行くこともよくある。この人間関係もエイサーがあるから構築できたものである。



写真 21 ゆんたぐの様子



写真 22 ゆんたぐの様子

エイサー

青年会は単なるエイサー集団、芸能集団ではない。エイサーをするための青年会ではないと語る。エイサーは人を集める良い手段。また一つの団体競技であるから社会人としての上下関係を学べるものである。またエイサーは世代交代され受け継がれていくものであるから、エイサーをすることによって青年会で出会った人とは死ぬまで付き合い合っていける。青年会を始める時はエイサーが目的であってもいい。活動していくうちにエイサーは目的ではなく手段であることに気づくはずである。

地域とのつながり

青年会は地域を盛り上げる、地域のための活動。そのための手段がエイサーである。地域があって、その上に青年会があり、地域の協力、理解がなければ青年会は成り立たない。この地域と青年会という集団のつながりは本当に素晴らしいものであるという。内間という土台があって内間青年会があり、地域に貢献していかなければいけないし、そうでありたい。

課題

このように 20 代後半の世代の会員は、青年会に対して深い理解や思いをもっている。ここで、現在問題となっているのが、下の世代、若年層の教育である。

この内間青年会は当時の暴行事件を受けて、地域のために立ち上がってできた青年会である。この当時の思いがちゃんと伝わっているか見えてこない。また、昔は不良と呼ばれていた青年がエイサーをすることで個人を見てもらえて居場所を見つけていたため本当に意味のあることだったから、とても熱を入れて練習していた。携帯電話

も普及していなかったため、公民館に行けば会えるし公民館に行かなければ話せなかった。しかしだからこそ信頼関係も築きやすかった。携帯電話は便利さ故の不便の象徴であるように思う。

よって今の若い世代はどうしても思いがないように感じる。22～24歳の会員は結婚や就職で青年会を離れてしまう人が多いが、その年齢の世代は青年会を理解してやっと若年層に指導できる時期であり、若年層との年齢差も教える上で一番良い時期なのだが、世代に穴が開いてしまい下の世代を育てられていない。

社会の変化もあって、昔のように遅くまで練習をしたりできず、ついてこれない青年も多い。自分の意見をはっきり言えず本気でぶつかり合えない。これらはまだ青年会の活動にあまり意味を見出せていないからではないかと思う。社会の変化、青年らの質の変化に合わせて指導方法も変えていかなくてはならない。

今後の一番の課題は青年会の底上げである。また、これまでの16年間で行ってきた様々な活動を今後どう生かし盛り上げていくかが焦点となっている。



写真 23 ゆんたくの様子



写真 24 集合写真

4.3 沖縄市園田青年会

沖縄市は「エイサー発祥の地」として有名な土地である。その中でも第一線で活躍しているのが園田青年会である。全島エイサーコンクールでも最多優勝を誇り、映画「涙そうそう」にも出演するなど、実力知名度ともに優れている青年会である。

フィールドワークでは現青年会長の高江洲昌志さんにインタビューを行い、後日実際に園田公民館での練習を見学させていただいた。



写真 25 園田公民館入り口

(1) 青年会の現在の構成

元は「西里青年会」という名称で 1954 年から 4 年間活動していたが、1959 年に「園田青年会」と改称した。現在の園田青年会となってから 49 年目になる。高校一年生から入会でき年齢の上限はなく、現在青年会員は 110 名ほどである。園田地区以外の会員も多い。練習は 7 月中旬から始まり、毎日 20 時から 22 時まで行われる。

全島エイサーまつりをはじめ、数多くのイベントで演舞を行っており、県外からの演舞要請もとても多く、「今までで全ての都道府県から 1 度は要請を受けたと思う」と青年会長も話すほどである。今年度は福岡、山形、東京の 3 都県へ行き、エイサー指導を行い祭りに参加して演舞を披露した。エイサーシーズンといえる 7・8・9 月以外の時期であっても結婚式の余興としてエイサーを踊ったりするため 1 年に 50 回は演舞の場があり、1 年を通してエイサーを行っている。

その他子ども会に毎年エイサーを教えに行き、青年会と子ども会合同の旅行や、バスを貸しきり老人会のご老人方を招待して遠足を行うなど世代間の交流の機会を設けている。また地域との交流の機会として、自治会が主催する陸上大会や、清掃活動、ボランティア活動も行っている。

(2) 青年会の歴史

ここでは「西里青年会」から「園田青年会」と改称した経緯について中心に述べる。

現在の園田地区一帯は昔原野で人口はあまり多くなかった。しかし戦争で土地を失った山内、諸見里、山里の人々が終戦後に多く移住してくることになり、この地区はまず諸見里地区に含まれるようになる。その後、さらに様々な地区からの移住者が増えたため、「園田」という地名がつけられた。



写真 26 公民館に飾られている写真

その移住者の中に西里地区の人もあり、西里地区出身者が自分達の地区にあったエイサー（ヤキマージエイサーという）を踊りだしたことが始まりである。最初は西里出身者だけで踊っていたが、徐々に様々な地区出身の園田に住む人々で踊るようになった。1956 年の第一回エイサーコンクールは「西里青年会」で出場できたが、園田地区の青年会であることなどを理由に名前を改称しなければコンクールに出場できなくなってしまったため、名称を「園田青年会」と改めることになり、西里青年会と分離し、園田青年会が発足した。その後、エイサーコンクールでは全 22 回中 7 回最多の優勝回数を誇るようになる。

発足当時は 8、9 名ほどしかいなかった。それまでは自分たちの地域のエイサーはなかったため、村おこしの一環としてエイサーを作り踊るようになったことが園田エイサーの始まりである。

また、現在も続いている活動として子ども会に所属する 100 人以上の子どもに毎年エイサーを教えにしている。また地域のおじいちゃんおばあちゃんを招待し貸し切りバスで遠足に行ったりと、地域への貢献をしている。

(3) 現状と課題

青年会員の方々へのインタビューで得たことをもとに青年会について会員自身が現在どのように感じているかを明らかにし、そこから見えてくる課題を述べる。

青年会

青年会は第二の家族である。暇があれば公民館に集まる。夜 11 時に公民館に帰ってきて、深夜 3 時ごろまで飲み、語り合い、公民館でそのまま寝て仕事へいくこともよくあるという。青年会は保存会とは違い、若い世代がどんどん入ってきて世代交代があり、若い世代が盛り上げてくれる。また、どんな形であっても、ずっと青年会に関わっていくことができ、長い付き合いのできる仲間を見つけられる。年をとって実際に演舞に参加することがなくなったとしても、指導や見学などできることはたくさんある。実際に、世代に穴があきそうになっても、先輩方の支援・協力が強いために今の世代まで残り続けてきている。

そして青年会は人を集めるものであり、全島エイサーがその表れである。

エイサー

本土との青年会の違いはエイサーの有無だ。エイサーは皆で一緒に踊る団体の演舞であり、楽しさの中にも厳しさがある。若い世代の人はエイサーがやりたい一心で入会してくるが、青年会として活動するうちに、地域を盛り上げたいという思いがめばえてくる。結婚式や会社の記念式典、お店などで余興エイサーを頼まれ演舞することは 1 年に 50 回以上あり、1 年を通してエイサーを踊り続けている。よって、エイサーの腕を磨き、エイサーを残し続けていくことが先輩方や地域の人々への恩返しであると考えている。

またエイサーは地域と関わるために良い。エイサーを通して築いた人間関係は強く、たとえば成人式においてどんな不良と呼ばれる人も、先輩、後輩や近所の人の前で変なことはできないと思うようになる。

エイサーを通じ、高校の文化祭で演舞するために指導要請がくることでまた交流できる。更に同じ世代の青年会員を指導に向かわせることで、会員の成長にもつながり、エイサーがあることで生まれるものはたくさんある。

地域

園田青年会発足から 50 年間、ずっと地域のことを考え、貢献できるように活動し



写真 27 練習の様子

てきている。地域に尊敬される青年会を目標としているのも、青年会が活動できているのは園田という地域が基盤としてあるからである。道ジュネーなどエイサーを踊る上で地域の理解は欠かせないものだ。地域の人、それ以外の人であってもエイサーだけをみているのではない。よって前述の通り地域の人々と遠足に行ったり、敬老会で演舞を披露したり、また他にもボランティア活動も積極的に行っている。

そして一番の貢献として、エイサーを残し続け、磨き続けることで地域の人々を楽しませ、沖縄市園田の名前を全国に広めていきたいと考えている。

課題

昔に比べ、新たに入ってくる若い世代が減ってきている。子ども会で100人以上に教えたとしても、実際に青年会に入るのはその半数にも満たない。昔は遊ぶところが少なかったため、皆が公民館に集まってエイサーをしていたが、今ではエイサーは見るとする人が増えてきてしまっている。

また現在青年会に所属する高校生は30人ほどいるが、学校を中心に生活させるようにしている。以前はエイサーを中心にできていたが、社会の変化に合わせ、周りからも認められるように活動の方針も変化させていかななくてはならない。ただはじめはつけるように、テスト前は練習を休む許可を取らせるようにしているという。そこで勉強とエイサーの両立は大変であるため、一人一人へのケアをしていくことが必要である。

また子どもたちへの指導方法も、今は頭ごなしに言っただけではついてこないことが多い。本当は今も昔も若い世代のエイサーをやりたいという熱意は変わっていない。しかし実際毎年5名ほどやめる人がいるため、どう伝えるかが大切になってくる。



写真 28 話し合いの様子



写真 29 練習の様子と指示をする会長

5. まとめ

今回は3つの青年会について取り上げた。活動内容や歴史は様々であるが、地域を基盤として、地域住民とのつながりを大切にしている点は一貫して共通していた。またどの青年会でも「青年会は第二の家族」という言葉を何度も耳にした。地域や歴史は違っていても、旗頭やエイサーという大きな芸能を通し、信頼し尊敬し合える仲間

に出会い居場所をもつ青年会員の思いも同様に共通している。

内間青年会と園田青年会は発足時期や歴史が大きく異なっているため、エイサーのみで比較すると抱える課題や対外に向けての活動もやはり異なるようだ。しかしながら、どちらの青年会でも社会の変化によって練習時間の短縮を余儀なくされたり、学業など他にしなくてはいけないことの多い青年、特に高校生の指導や強化が課題となっている。

また、沖縄県全体の動きをみると、エイサーが最も盛り上がる7・8・9月を中心にして、青年祭の開催など青年たちの活動も最も活発になっているようだ。これは青年会が参加するエイサーの行事が今や県民的行事ともなったように、沖縄に多大な影響力を持ち、その他の青年たちをも触発している表れではないだろうか。

注

- 1) 芸能や祭りで集落の路地などを練り歩く行列のこと。
- 2) かき混ぜるという意味。琉球踊りの手踊りの代表的なもの。全島エイサーまつりでは全出場団体の演舞が終わったあと、全団体と会場のお客さんも混じって踊る。
- 3) 集まっておしゃべりすること。

参考文献

山城千秋(2007)『沖縄のシマ社会と青年会活動』エイデル研究所

参考ウェブサイト

園田青年会公式ホームページ <http://www.sonda-eisa.info/>

沖縄県青年団協議会ホームページ <http://blog.livedoor.jp/okiseikyo/>

沖縄市青年団協議会ホームページ <http://eisa-okinawa.hp.infoseek.co.jp/>